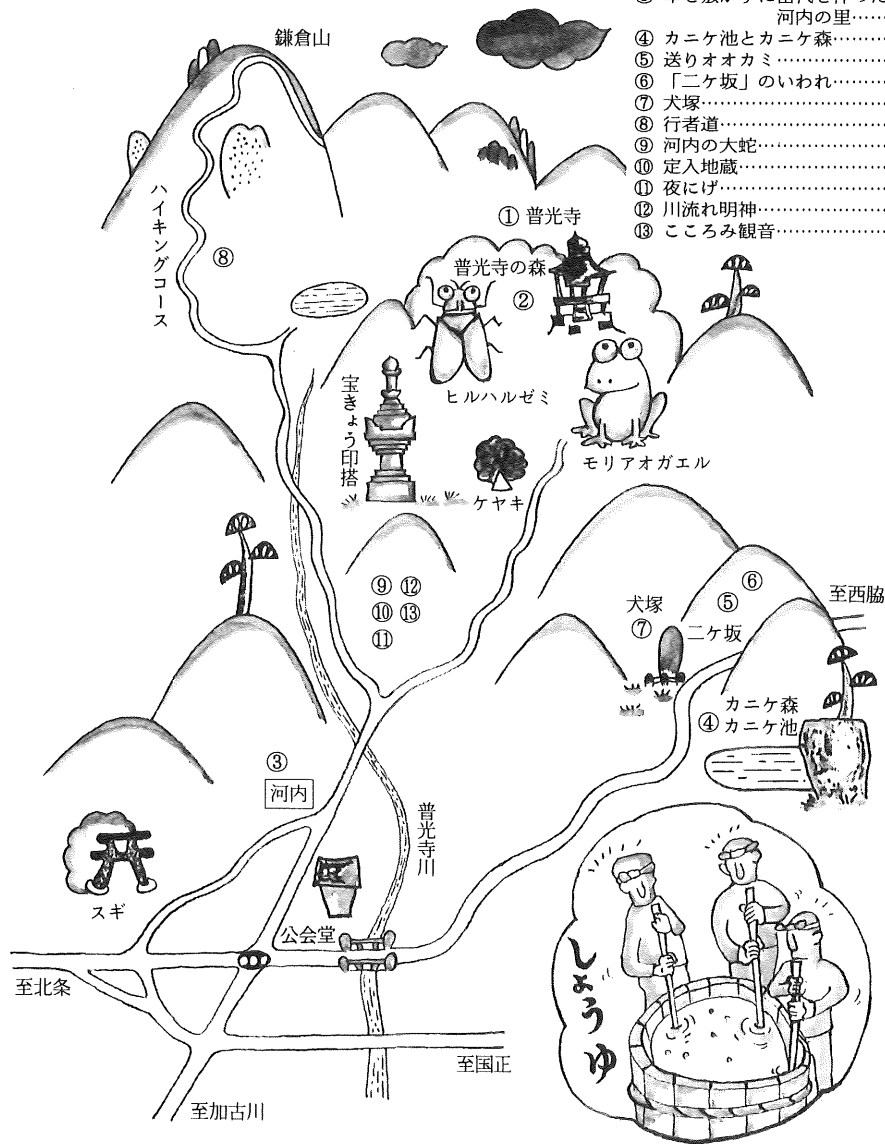


11 自然豊かな河内里 7.5キロメートル

- ① 蓬萊山普光寺……………219
- ② 議論桜……………220
- ③ 草を敷かずに苗代を作った
河内の里……………222
- ④ カニケ池とカニケ森……………223
- ⑤ 送りオオカミ……………224
- ⑥ 「二ヶ坂」のいわれ……………227
- ⑦ 犬塚……………228
- ⑧ 行者道……………231
- ⑨ 河内の大蛇……………232
- ⑩ 定入地藏……………233
- ⑪ 夜にげ……………233
- ⑫ 川流れ明神……………234
- ⑬ こころみ観音……………235



・モリアオガエル（市指定天然記念物）

体長七〜九センチメートルの青緑色に赤褐色の斑点があるカエルで、樹上の泡中に卵を産むというおもしろい習性をもっています。生棲地が限られていてめずらしいものです。

・ヒメハルゼミ（市指定天然記念物）

外形はヒグラシによく似ていますが、大きさは半分程の非常に小さいセミです。照葉樹林にだけしか住まないのが、分布地が限られていて近畿地方ではごくまれです。いっせいに大きな声で鳴くなど、習性もおもしろく、貴重な生物です。

・普光寺宝篋印塔（市指定文化財）

高さ二、六六メートルで、完全な姿を伝えています。様式手法から室町時代初期の造立と思われる。

蓬萊山普光寺（河内町）

河内町の普光寺は、夏になるとキャンプ場が開かれ、元気な子どもたちの歓声がこだましています。

また、境内はめずらしい照葉樹しょうようじゆの原生林におおわれていて、モリアオガエルやヒメハルゼミといった貴重な動植物が生育しているので有名です。

このお寺は、昔は六ヶ寺もあって、たいへん栄えたお寺です。そのためお寺の境内付近には、下坊・動明坊・谷の坊・中正坊・日向坊・ホソノ坊・南の坊・梅の坊・常住坊などの地名が残っています。

その昔、インドの国から紫雲しうんに乗ってやって来て、法華山一乗寺などたくさんのお寺を開いたと伝えられている法道仙人が、この普光寺を開か基きした人とされています。

法道仙人は、ある日不思議な夢を見たのです。夢の中に現われた仏さまが、しきりに河内町の奥山を示されるのです。そこで、法道仙人がこの山に登りますと、仏の声がします。たずねていきますと、千手観音の



靈像が石の上にあり、千本の手の先からことごとく光をはなっているのを見つけました。法道仙人が驚いてその場にひれふしますと、「千手観音は、この蓬萊山を守護するものである」という声が聞こえました。そこで法道仙人は、ここに伽藍を建て、この千手観音菩薩をおまつりしました。これが普光寺のはじまりだということです。

また、この法道仙人が四十八ヶ寺の建立を祈願して、岩洞に入られたという岩が今も残っております。地元では法道仙人が香花をたいて祈られたということからこの岩を抹香岩と呼んでいます。

議論桜（河内町）

仁平年間といえますから、今から八百年以上も昔のことになります。

時の近衛天皇の勅命によって、播磨六山の高僧が、北条酒見の住吉神社で、国家の繁栄と五穀豊穰を祈願して、大般若経六百巻を讀誦したことがあります。

この時、寺の序列を定めることになり、その方法として、天台宗の教義について議論をたたかわせ、その出来ばえのいかんによって序列をつけようということになりました。

普光寺では、たくさんある坊の中のある坊の僧が、一山を代表して議論に加わることになりました。しかしその結果はさんざんで、議論に完全に敗れてしまいました。

この僧は、このことを非常に残念に思うとともに、自分の修業のたりなさを、大変恥ずかしく思いましたので、坊に帰るとすぐに坊の前に桜を植え、桜の大きくなるのに負けないように、自分も修業をつんでいこうと誓いました。

年月がたって、桜の木は驚くほどの大木になり、春にはみごとな花をいっぱいにつけるようになりました。それと同じように、この僧も立派な高僧となって、みんなの尊敬を集めるようになったということです。

年移り、世は流転して、今では坊の名はおろか、僧の名も、桜の姿も、うかがい知ることができなくなりました。が、議論が合ったということだけが、いつまでも語りつがれているのです。

(内藤熊太郎氏の話より)

草を敷かずに苗代を作った河内の里（河内町）

昔、摂津国せつつのくにの住吉すみよしの大神おおなみが、西国をまわられた帰りに、鴨郡かもつり（加西市）三重みえのさと里（北条町）の住吉神社にたち寄りられました。

そのついでにと、北条きたじょうの住吉神すみよしのかみが以前に住んでおられた河内里こうちのさとの鎌倉峰かまくらのみねをたずねられることになりました。

河内里についた一行は、そこで食事をされました。お供の神たちは、座すわる場所がないので、里人が苗代に入れるためにと、草を刈って束ねているのを、バラバラに解き散らして、その上に座すって食事しました。草の持主が、これを見て大いに嘆き、大神に「おそれながら」と訴え出ました。大神は「そうか、それならお前の田は草を敷かずとも、草を敷いたと同じように、苗がみごとに成長するようにしてやろう」と、約束しました。

それ以後、この村の田は、今でも草を敷かずに苗代を作るようになったということです。

（播磨風土記より）

カニヶ池とカニヶ森（河内町）

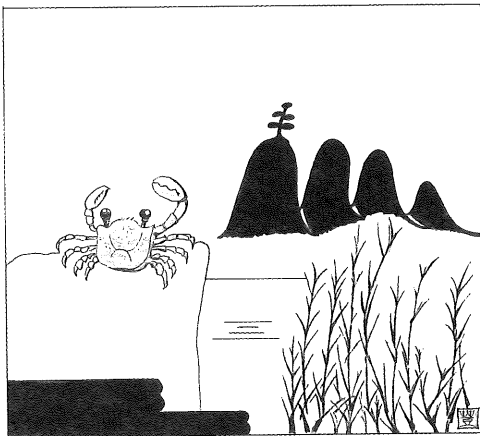
河内町の東、二ヶ坂に登る道のそばに「カニヶ池」という深い池がある。

この池に、それはそれは大きなカニが住んでいたそう。この大ガニは、夜が明けて暖かい太陽がサンサンと池に降りそそぐ頃になると、きまって甲ら干しをしに姿を現わしたもんだ。ちょうどよいぐあいに、池のそばにある小高い山から、池の上へ岩がせり出していたんだ。その岩の上で、のんびりと甲らを干してござった。

里人たちは、「ありゃほんまに、池の主だな」といいあっていたもんだ。いつとはなくこの池を、カニヶ池と呼ぶようになったんだ。ところが、ある日のことだ。この大ガニが日が暮れても岩に登ったまま、池へ帰らないのだ。

「おかしいこともあるもんだ」

と、村一番のもの知り男がソォーッと近づいて、へっぴり腰でのぞいて見たんだな。



年をとったためだろう、大ガニは岩の上で甲らを干しながら死んでいたんだ。里人たちはみんなでこの大ガニの死がいを、池の下の田んぼの隅に手厚く葬ってやった。その上に立派な塚を立てたんだな。

月日がたって、塚には草が生え、笹竹が茂り、小さな森になったんだ。今ではこれをカニヶ森と呼んでいる。

(広田京子氏集録の話より)

送りオオカミ(河内町)

わしが、まだ小さい坊主だった頃のことじゃった。

今の河内の二ヶ坂は、道がきれいに舗装ほそうされて坂のようになくなってしまったが、その頃は荷車がやあつと通れるか通れないかの、それはそれはくねくねと曲りくねった峠道だったんじゃ。

そうよのう、昼でもうす暗いくらいじゃったから、おいはぎが出ると言うとなつたし、この峠を通るもんはみんなこわごわ通ったもんじゃ。

わしは母親につれられて、野間のま（八千代町）の親類へ行つたんじゃ。冬の日は短いでのう。ちょうどこの二ヶ坂へさしかかった頃には、日はとっぷりと暮れてしもうてのう。

おとろしいもんじゃから、わしは、母親の尻にしっかりとへばりついて歩いたもんじゃ。母親のジョリ（草履）をふんで、何度もころびそうになったことを、ついこの間のように覚えるがのう。

母親は一言も口をきかんのじゃ。今から思うたら、母親もそれはそれは心細かつたんじゃろうて。峠の上まで後もうちよっとのところまで来たころじゃった。後から何かがついてくる気配がするんじゃ。そんでのう。わしは、母親の袖口を引っぱって知らせようとしたんじゃ。力いっぱい引っぱつたんじゃが、母親はわしをぶらさげるようにして、前を向いたまんま、おこつたように、どんどん登っていくだけなんじゃ。そりあ、もう、おとろしいて、おとろしいて、生きた心ちがせなんだ。

峠の頂に登りついて、一軒茶屋のそばまで来た時じゃ。母親は前を向いたまんま、小声で

「後をふり向かんようにして、しっかりついてくるんやで。ええなあ」と念を押したんじゃ。

走るようにして帰つたもんじゃ。どこをどう帰つて来たんか、ようわからなんだが、夜空に黒々とわが家が見えだした時には、ほんまに、生きかえつたようじゃった。

母親は、わしを戸のくちに押し込むようにして、ピシャンとおお戸を締めてくれた。そして自分のはいて

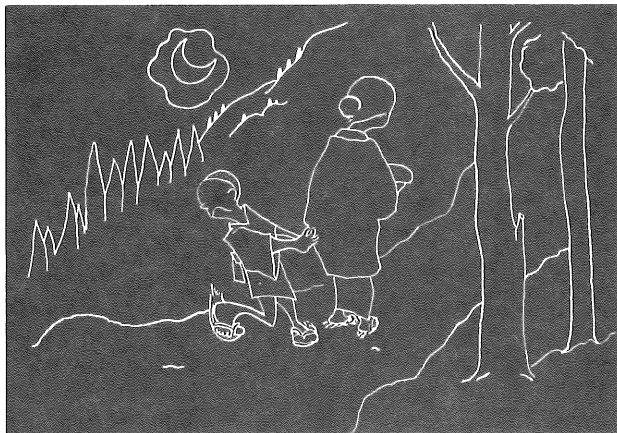
帰ったジョリに、ごはんを一盛もって、戸口のすき間からソオツと外へ出したんじゃな。

しばらくすると、かど先のあたりで、「ウオン」と、ものすごいけもの声が出たんじゃ。障子がピリッ、ピリッとふるうたんじゃ。

お前たちは、こんな話は信じんじやろうが、「これが送りオオカミじゃ」いうて、その時、わしは母親からおしえてもろうた。

背すじがにわかになくなるのを感じたもんじゃ。

(中塚道光氏の話より)



「二ヶ坂」のいわれ（河内町・西脇市）

昔、讃岐国（四国）に讃伎日子という若者の神さまが住んでいました。讃伎日子は大変むこうみずで乱暴な若者でしたので、丹波国に氷上刀売という美しい娘が住んでいることを人づてに聞くと、すぐにも自分の后にしたいと思いました。一度心に決めると矢も楯もたまりません。すぐさま使いの者を丹波国に送って、氷上刀売に「自分の妻になるように」と求婚しました。しかし、氷上刀売は遠く海を隔てた南の島のしかも見も知らない人のところへ行く気にはとうていなれません。そこで、

「おころざしはありがたいと思いますが、お許し下さい。」とていねいにことわって使いの者を帰しました。讃伎日子はこれに非常に腹を立て、

「よし、それなら兵を送って力ずくでも娘をつれて帰り、わしの妻にして見せる。」と、たくさんの兵隊をつれて丹波国に攻め入って来ました。丹波国では上を下への大さわぎになりました。そして針間国の建石命に援軍を頼みました。建石命は「困っておられるなら力を貸しましょう」と、心よくひき受け、讃伎日子の軍を迎え討って激しく戦いました。建石命にさんざん打ち破られた讃伎日子は、命からがら逃げのびたということです。西脇市明楽寺あたりは法太の里と呼ばれていましたが、これは讃伎日子が這って逃げ帰った所から法太となったと言われ、この時、讃伎日子をここまで追って来た建石命が、

「もう二度とこの坂から丹波の国へ入って来ることを許さない」といって、目じるしに御冠（帽子）を置いたので、この坂を「みか坂」（二ヶ坂）と呼ぶようになったのだということですよ。

また一説には、二ヶ坂の名のおこりは、昔播磨国と丹波国の境をきめた時、大甕（神酒を入れるカメ）をここにうずめて境の目じるしにしたので甕坂といったのにはじまるとも伝えられています。

さらに応神天皇が修布里（吸谷町あたり）で狩をされた時、射られた鴨を煮た坂なので「煮坂」と呼ばれ、二ヶ坂となったともいいます。

（播磨風土記より）

犬塚（河内町）

昔、二ヶ坂は、それはそれはいそがしい峠道でしたが、姫路から丹波・丹後へぬける街道にあたっていましたので、たくさんの旅人たちがここを通りました。

峠の頂上には、二軒の茶店がありました。一軒は紅白の饅頭を、他の一軒は酒饅頭を売っておりました。やっとの思いで登って来た人たちは、この店で一息入れてから旅を続けましたので、茶店はそれなりに繁昌

しておりました。どちらの店の饅頭も、たいそうおいしくて評判でしたが、茶店にはもう一つの評判のものがありません。それは、紅白の饅頭を売っていた「たま屋」に飼われている「智光」というまっ白な犬でした。

「智光」は、丹波立杭からもらわれて来た犬でしたが、ずい分利口な働きものの犬でした。人通りのとだえた夜には、茶店の主人にとっては何よりも心強い番犬でしたし、山に入ってはすばらしい獵犬でした。

ところで、隣の富家村（和泉）に一人の商人が住んでおりました。男は、毎日のように品物を背負ってはこの二ヶ坂を通りました。そして「しろ」を大変可愛がっておりました。

ところが、仕事の無理がたたったのでしようか、この男はにわかには足腰がたたなくなり、床についてしまいました。病状は悪くなるばかりで、膿さえ出るようになり、その痛さに眠ることも出来ない毎日が続いておりました。昼夜の感覚もなくなり、目覚めているのか眠っているのかさえも、自分ではっきりしない、もうろうとした状態になってしまいました。

夢でしようか、幻でしようか、その時、男のそばにあの可愛がっていた峠の「しろ」がやって来て、膿の出ている患部をていねいになめてくれているのです。とても気持ちが悪くなった男は、そのまま安心して深い眠りに落ちました。

どのくらいの時間眠っていたのかわかりません。目が覚めた男は、「しろ」の名を二度三度と呼んでみま

したが、姿はどこにもみつかりませんでした。しかし、あんなにもがまん出来なかった痛みが、うそのように消えているのです。そして、それからというもの、日一日と病気は回復していき、男はすっかり元どおりの元氣なからだになりました。

このうわさはたちまち世間に広がって、「しろ」の評判はますます高くなっていきました。

何年かの後、「しろ」の死を悲しんだ人たちは、「しろ」

が生まれた立杭から石を取り寄せ、峠に立派な塚をたてて、その霊れいをなぐさめました。この塚には、毎日たくさんの人々がお参りしたため、塚の前に線香屋ができたほどだということです。

しかし、「しろ」が死んでからは、あんなに繁昌はんじょうしていた茶店も、だんだんにさびれていき、やがて店をたたんでしまいました。犬塚は、後々までも手厚く祀られました。そして、おまつりした人は金持になつてしあわせな暮らしができたといわれています。



行者道（河内町）

河内を包む山々は、「行場」として遠近に知られている。大峰山のそれには比すべくもないが、その険峻隘路は、よく一念発起の修験者たちに「行」の醍醐味を感得させるに十分である。この地に大峰山を模して行場が開かれたのは、明治三十五年九月一日と言う。時の普光寺塔頭明星院住職・蓬萊実隆の尽力による。

かつて同村には病人が多く、また早害の憂がたえなかったため、大峰信仰が起ったと伝える。とくに法道仙人入定の地と称される鎌倉寺背後の岩山は、古来より山岳信仰の霊地とされた。

河内町の集落をすぎ、東山の南麓にかかると石の鳥居がある。行者道の起点である。しばらく進むと不動堂に達する。この堂は行者堂あるいは護摩堂ともよばれ、毎年十二月には護摩がたかれる。これより道は急峻をきわめ、やがて行く手に重畳とした岩山があらわれる。七月二十四日の愛宕講に松明を焚く所である。さらに峰をよじ登り、右に二ヶ坂を望みつつ登って行くと、加西市・西脇市（明楽寺）・多可郡（八千代町）の境界に達する。ここはちょうど普光寺山の頂きで、往時、蓬萊但馬守と称した土豪が拠った構居跡のある八ノ尾嶺である。

これより道は下りとなる。東のノゾキを越して河内町から柳（八千代町）に通じる山道を横切り、尾根伝いに登ると鎌倉山の頂上である。かつての雨乞い習俗をとどめる焚穴と、法起菩薩の尊像をすえたこの頂き

は、北に八千代町の集落・南に旧富家庄の盆地を俯瞰するに絶好の場所と言える。

これより下りかけると、左手に目もくらむばかりの絶壁がある。岩壁に行者像が刻まれ、西のノゾキと称する。赤さびた鉄鎖を伝ってさらに下ると鎌倉寺の本堂に着き、行者道は終る。この間約四キロメートル余、
嚴重な身ごしらえで巡るのに約四時間を要すると言う。

(河内の里より)

河内の大蛇 (河内町)

昔、河内の山に棒のように大きな大蛇が住んでいたという。大蛇を見た者は頭が割れるように痛み、高い熱にうなされて死んだ。いつの頃だか、大水が出てこの大蛇が割木谷から下河内あたりへ流れてきた。そのため、河内のはずれに近い普光寺川を「蛇が淵」、その近くの田を「蛇が坪」とよんでいる。

(北播磨の伝説・吉田倉三氏編著より)

定入り地蔵（河内町）

「定入り地蔵」とは、行者道の入口左側にすわってござる地蔵尊のよび名である。伝えるところによると、むかし生きながら埋葬され村の安穩を祈りつつ入定した人がいた。感動した村人たちは、その上に一軀の地蔵さんを安置し、供養をおこたらなかった。

どんな願いもききとどけてくださる靈験あらたかな地蔵で、いまだに香華をたむける人が絶えない。とくに幼児のよばり（夜尿症）によくきくといわれ、河内付近の人で幼い頃ここへ願かけにおまいりした人は少なくない。

大正の頃までは、八月二十三日の地蔵盆がにぎやかにいとなまれ、河内の夏をいろどる風物詩であったと言う。

（河内の里より）

夜にげ（河内町）

昔、河内村のある男が、借金がかさみどうにも動きがとれなくなり、かみさんと相談した結果、夜にげを

することにした。村人が寝しずまるのを待って、家財を車に積み、夜明けまじかに家をぬけ出した。どんどん歩き、下里村のはずれまで来て「やれ大丈夫」と一息いれ、ふと後をふりかえると、朝日に照らされた鎌倉山がいきなり目へとびこんだ。その神々しい姿を見て、男はヘナヘナとその場で泣き伏してしまった。

夜にげを思いかえした男は、ふたたび家へ帰ってきた。一生けんめい働いて借金をかえし、男の家族は平和に暮らしたという。

(北播磨の伝説・吉田省三氏編著より)

川流れ明神 (河内町)

鎌倉山(河内町)のご神体は、靈験あらたかなことで聞こえていた。昔、ある男がこれを加東の地へ勧請しようとして、背中において大川(加古川)を渡った。ところが、水かさが多くてご神体を流してしまった。すこししも手で釣りをしていた漁師がこれをつりあげ、びっくりして社やしろを建てて祀った。それがいまの佐保神社だという。

このとき、ご神体は北条へも移され、酒見明神(住吉神社)となったと伝える。

(北播磨の伝説・吉田省三氏編著より)

こころみ観音（河内町）

昔、鎌倉山の山ふところに鎌倉寺という寺があった。播磨に四十八か寺を開いた法道仙人が入定（死ぬこと）したと伝える寺である。

鎌倉寺の本尊は、「こころみ観音」とよばれる。伝承によると、徳道上人が勅命によって大和国（奈良県）長谷寺の本尊をきざんだとき、霊木の第二の片きれで、まず試みに作ったのがこの像だという。この霊木は、近江国（滋賀県）高島郡の浜（琵琶湖）に流れついた流木であったと伝える。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

